

会 議 録

1 あいさつ（安宅農林水産技術支援統括本部長）

平成23年5月に統括本部が設置され、出先機関扱いであった農林水産総合技術支援センターが本庁組織に位置づけられました。これまで以上に、政策企画立案能力の強化や施策の総合的な推進を図っていきます。また、平成25年の拠点施設の運用開始に向け、研究・普及・教育が一体となった知の拠点として運用してまいります。委員の皆様には個々評価・ご意見をお願いいたします。

2 説明事項

徳島県立農林水産総合技術支援センター外部評価について、徳島県立農林水産総合技術支援センター外部評価実施要領を説明。

3 外部評価委員長，副委員長の選出

徳島県立農林水産総合技術支援センター外部評価委員会の委員長として諸岡委員が選出された。

副委員長として、浜野委員と斎藤委員が指名された。

4 議事

（1）平成23年度外部評価の実施について

評価対象業務の概要や平成23年度の実施計画について説明。

（2）平成24年度新規研究候補課題の事前評価について

試験研究評価の取り組みや結果の概要について説明。

各研究所長より平成24年度新規プロジェクト研究課題を説明。

●地球温暖化から農林水産業を守る研究開発事業

①「高温下でもおいしい水稻栽培技術の開発」に関する質疑応答

委 員：一等米比率が全国平均の75%に比べ、徳島県の平均値が53%と低い。暖地でより強く影響を受けているということか。

回 答：北日本の産地に比べ、西南暖地の一等米比率の平均は15ポイント程度低い。香川県の1等米比率は徳島県より低い。

委 員：高知県も白未熟粒対策の研究に取り組んでいるが、県同士の情報交換や連携はどのように図っているのか。

回 答：全国場所長会や研究会議で情報交換を行っている。また、福井県や滋賀県が育

成した品種を取り寄せ試験を行う予定である。

委員：等級が下がると500円/袋程度下がるので、生産者にとって関心の高い研究と思われる。しかし生産者の高齢化に伴い、肥培管理、病害虫管理、水管理等の手間を省き品質低下を招いている面もある。

回答：確かに高齢化等に伴いきめ細かい栽培管理が難しくなり、品質の低下にも繋がっている。

今回の試験では、全量一発肥えで省力化を図りながら、品質を高めていきたい。

委員：米作りは採算が合わない。単価を見込んだ品種の選定や肥培管理方法をお願いしたい。

回答：水稻農家の経営が厳しいことは十分に承知している。コストを抑えた栽培方法等を示したい。

委員：徳島産米は宮城産米に比べ品質が劣っている。徳島はコシヒカリ、キヌヒカリをよく見るが、気候・風土にあった品種は栽培できないのか。

回答：北日本のお米には品質・味とも徳島県産より優れている。ただし、県南の早期米のように他産地より早い出荷に取り組んでいる状況である。

②「熱死から鶏を救う冷却水を活用した「鶏舎クールシステム」の構築」に関する質疑応答

委員：暑熱対策として冷水の効果は分かっていたが、動物によって最適な飲水温度については分からなかったなので、研究をすすめて欲しい。ウシにも応用して欲しい。

回答：平成24年に温度別飲水給与試験を実施し、生産性が向上する最適温度についてはメドをつけたい。

委員：暑熱対策として、鶏の羽を刈るなどの対策は？

回答：採卵用の鶏の場合、強制換羽で活性化を図ることがあるが、ブロイラーは出荷まで7～8週程度と短く難しいので、本試験では飲水を中心に研究を行う予定である。

③「温暖化により増加したキノコ害虫の総合防除技術の開発」に関する質疑応答

委員：害虫の天敵とはどのようなものか。

回 答：農薬登録されている生物農薬の線虫を用いる。シイタケを食害せず安全性に問題はない。

委 員：換気扇等から害虫が侵入してくるのか。

回 答：菌床ハウス栽培は、出入り口等から害虫が侵入し、ハウス内で増殖する。出入り口の捕殺器設置や発生源となる廃菌床の適切な処分等が必要。

委 員：これら害虫は年間通じて発生するのか。

回 答：発生密度は変化するが、年間通じて害虫は発生する。

委 員：県内（眉山地区）に捕殺器の導入はあるのか。

回 答：あると聞いている。1基8,800円程度。

●もうかる農林水産業ステップアップ研究開発事業

①「天敵・耐病性品種利用でイメージアップ！もうかるキュウリ生産技術の開発」に関する質疑応答

委 員：耐病性の品種のみ追求をしていると食味の低下が懸念される。試験時には外観品質だけでなく、食味試験も行って欲しい。

回 答：安定生産はもとより、消費者に受け入れられる農産物の開発に取り組んでいきたい。

②「スダチ産地を強化するスダチ新品種の育成」に関する質疑応答

委 員：徳島の特産「スダチ」の販売・宣伝方法も考えて欲しい。

回 答：従前から県としてスダチの消費拡大に繋がるPRに力を入れてきた。今後もより一層消費拡大に向け取り組んでいきたい。本研究では、消費者ニーズにマッチした品種はもとより、先を見越した品種の開発にも取り組んでいきたい。

回 答：景気の影響を受けてスダチの販売は落ち込んでいるが、本研究ではピロリ菌に効果のあるスダチチンの成分含量を高めたスダチの開発にも取り組み、消費拡大に繋げていきたい。

委 員：スダチはお盆時期に値段が高くなるなど消費者として購入しづらい。年間を通じて適正価格での販売をお願いする。

回 答：お盆時期の出荷品はハウス栽培である。資材費等の経費がかかり、単価が高く

なってしまうので、消費者の方にもご理解をいただきたい。

③「国産ヒジキの産地化を実現するヒジキ養殖技術の開発」に関する質疑応答

委員：ヒジキ需要は高いと思う。以前に和田島で試験を行った際、選別等に手間がかかるので慣れない漁師には難しいと聞いている。

回答：和田島での試験は養殖に課題があったと聞いている。本研究では選別作業は高齢者に担ってもらうことを想定している。研究結果をもとに要望があれば和田島でも普及を図っていきたい。

委員：漁師の意識改革が必要ということですが、方法について教えて欲しい。

回答：資料に示しているとおり、徳島大学や美波町の協力をいただき進めていく。

委員：南部漁村の構造改革に繋がる試験研究だと考えている。冬場に出漁できない県南漁村で、ヒジキ養殖業に取り組み収入を得ることは重要である。高齢者の仕事も創出できる。資料に150万円程度の収入が示されており、この数値が漁師の意識改革にもつながると考えている。また、LCA（ライフ・サイクル・アセスメント）の考えも取り入れられ、循環型社会を想定した研究課題である。

(3) 新規プロジェクト研究課題候補の評価表

新規プロジェクト研究課題候補の評価表の作成方法について説明。

(4) 平成24年度新規研究課題候補（プロジェクト研究以外の県単）

プロジェクト研究課題以外の各研究所が取り組む12課題について説明。

(5) センターの新拠点整備（知の拠点）の概要について

平成25年春から供用開始予定の農林水産総合技術支援センター新拠点について説明。

(6) 農業大学校の教育研修業務の評価

教育研修業務について説明。

農業大学校の現状と今後の方向について説明。

委員：3年前に発表した模擬会社の計画が実を結び、さらに大きくなった今回の発表を聞き、学生の成長や意欲の強さを感じた。

委員：先生の業務が増えたことに対する適切な業務の分担についてはどのように対処するのか。

回答：以前は、意欲の低い学生への指導に重点を置いていたが、留年制度を導入する

ことで負担を軽減する一方で、意欲のある学生への指導を重点化していきたい。

委員：入学者の伸びが予定より低いのでは。

回答：先日、高校の校長会でも農業大学校の取り組みについて説明を行った。また、学生募集説明会ではこれまで27名程度参加があり、うち女性が12名と新しい取り組みに対して女性が興味を持っていただいている。

(5) 連携取組事例プレゼンテーション

農林水産総合技術支援センターの連携取組事例について説明。